放眼日中

雨が降ったら中国の銀行はどうするの

コラムニスト・アジアンウオッチャー
須賀　努

すが・つとむ　東京外語大中国語科卒。金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。

正月は珍しく東京で過ごした。正直、景気が良いとはとても感じられない新年だった。物の値段は上がるし、何よりも街に活気が感じられない。それは寒かったせいだけではないだろう。テレビを見ると「賃上げ」が叫ばれているが、本当にその恩恵に浴する人はどれだけいるのだろうか。

家にいると電話が鳴った。出てみると、妻の実家がある地域の某地方銀行からだった。要件を聞くと、「もしご実家にお戻りの際はぜひ一度ご挨拶させてください」とその女性は言う。何か用事があるのかと聞くと、「いえ特にはありませんが、ご挨拶だけでも」と。

え、用事もないのにお客に出向いて来い、という意味なのか。こんな電話が掛かってくること自体、日本の銀行の悠長な様子は半端ないと思ってしまった。

だがよく考えてみると、彼女が妻の実家まで出向いてくるには遠すぎるし、しかも売るべき商品がない。定期預金はほぼ金利がなく、投資信託などをうかつに勧めると後で問題になる。それでまずは「ご挨拶」となるようだ。そう思うと彼女が気の毒になった。いや、日本の銀行員が気の毒なのかもしれない。

一方、筆者が駐在時代の口座を残している香港へ行くと、突然、携帯に電話が掛かってきた。「香港におられるなら、ぜひ銀行に来てください」と言う。アジア放浪者である筆者がどうして香港にいることが分かったのか？「先ほどATMで預金を引き出しましたね」と言うではないか。さらに畳み掛けるように「今は人民元の定期預金がお勧めですよ」とセールスしてくる。こちらのポートフォリオをみて、特性を判断し、勧める商品を絞っている。

日本でも香港でも、日本円や米ドル、ユーロの預金金利はほぼゼロである。それでは銀行も儲からないし、お客も儲からないので、リスク商品を勧めることになる。人民元定期預金といっても為替リスクはあるから、安全とは言えない。日本の個人が高金利に釣られて、豪ドル預金をやって大損した例などはよく見られる。

それにしても1人民元が20日本円という時代になった。筆者が北京に駐在していた5年前は12円だったから、どれだけ円が安くなったことか。先日、人民元の金利は数年ぶりに低下したが、それでも1年物定期預金の金利は3％程度ある。このリスクを一体どうみるのか、それがこれからの中国経済をみる一つの指標になるのかもしれない。

先日、北京へ行った時、雨の中、所用で某銀行に行くと、入り口で警備員が傘を持って待っていた。おかしいな、と思って入ってみると、雨漏りしているので、彼がお客に傘を差し掛けてカウンターまで案内していたのだ。ちょっと前まで中国の銀行といえば「サービス」などという言葉はなく、お客がお願いして取引してもらっている雰囲気だった。だいぶん変わったな、と思うが、支店が雨漏りとは…

この銀行の支店のように、中国経済も今年は雨が降る可能性がある。その時、銀行は庶民や中小企業に傘を差し出すだろうか？それとも一部の特権階級だけを優遇するだろうか？大企業だけを優遇してきた日本の銀行は今、打つ手がないのだが、果たして中国の銀行はどうするのだろう。